

さらしな姨捨の月が誘うもの

2014/1/8 キックオフ集会基調講演資料

——「わが心慰めかねつ…」の和歌で読みとく

鎌倉女子大学 竹内整一

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

(よみ人しらず『古今和歌集』)

信濃の国に更級といふ所に、男住みけり。若きときに親死にければ、をばなむ親のごとくに、若くよりあひ添そひてあるに、この妻の心、いと心憂きこと多くて、このしゅうとめ 姑の老いかがりてゐたるを常ににくみつつ、男にも、このをばの御心の、さがなくあしきことを言ひ聞かせ…。月のいと明かき夜、「おつな 媼ども、いざ給へ。寺に尊きわざする、見せ奉らむ。」と言ひければ、限りなく喜びて負はれにけり。…高き山の峰の、下り来べくもあらぬに置きて逃げて来ぬ。「やや。」と言へど、いらへもせで逃げて、家に来て思ひをるに、…いと悲しくおぼえけり。この山の上より、月もいと限りなく明かあくて出でたるを眺めて、夜一夜寝られず、悲しくおぼえければ、かくよみたりける、

わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て

とよみてなむ、また行きて迎へむかへ持て来にける。それよりのちなむ、姨捨山といひける。  
慰めがたしとは、これがよしになむありける。

(『大和物語』)

「慰めかねつ」↓姨捨山(更級)の月

- 1 あやしくも慰めがたき心かな姨捨山の月もみななく (小野小町『続古今和歌集』)
- 2 更級や夜渡る月の里人も慰めかねて衣打つなり (順徳院『続古今和歌集』)
- 3 いづこにも月は分わかじをいかなればさやけかるらん更級の山 (隆源法師『千載集』)
- 4 月見ては誰も心ぞなぐさまぬ姨捨山の麓ふもとならねど (藤原範永『後拾遺和歌集』)
- 5 姨捨山の月澄み昇りて、夜更よみくるままによろづ思ひ乱れたまふ。 (『源氏物語』宿木)
- 6 月の光をばすて山の心地して、人やりならずいみじく物思はし。 (『狭衣物語』)
- 7 さらしなや姥捨山の有明のつきあきずもものをおもふころかな (伊勢『新古今和歌集』)
- 8 天雲あまぐものはるるみ空の月かけに恨うらみなぐさむをばすての山 (西行『山家集』)

「慰めかねつ」／「慰む」(8、3)

なぐさむ ナグはナギ(凧)やナゴヤカ(和)のナゴと同根。波立ちを静め、おだやかにする意。 (『岩波古語辞典』)

慰 心と、おさえのばす意と音を示す尉とから成り、心をなだめる意を表わす。

c f 尉 火のしをかけてしわをのばす、上からおさえて正しくする。官名。軍事・警察・刑罰をつかさどる官。やすんじる、なぐさめる。 (『新字源』)

静む (＝鎮む、沈む)

シヅはシヅム(沈)、シヅク(霽)のシヅと同根。下に沈んで安定しているさま。

(『岩波古語辞典』)

## 月の光

1 月みればちぢにもこの悲しけれわが身一つの秋にはあらねど

(大江千里『古今集』)

2 影さえてまことに月の明き夜は心も空に浮かれてぞすむ

(西行『山家集』)

3 ともすれば月すむ空にあくがるる心のはてを知るよしもがな

(同)

4 ゆくへなく月に心の澄み澄みてはてはいかにかならむとすらむ

(同)

## すむ

「澄む」「清む」

浮遊物が全体として沈んで静止し、気体や液体が透明になる意。

「済む」

浮遊物が沈着・静止するように、いろいろな問題が片づき収まる意。

「住む」「棲む」

あちこち動きまわるものが、一つ所に落ちつき、定着する意。

(『岩波古語辞典』)

「すむ」／「すまない」

## 世阿弥「姨捨」

### ワキ(「都の旅人」)

かやうに候ふ者は、都方に住まひ仕る者にて候。われいまだ更級の月を見ず候ふ間、この秋思ひ立ちへと急ぎ候。…さてもわれ姨捨山に来て見れば、嶺平らかにして万里の空も隔なく。千里に限なく月の夜。…今宵の月を眺めばやと思ひ候。

### シテ(里の女)

さては都の人にてましますかや。さあらばわらはも月とともに、あらはれ出でて旅人の、夜遊を慰め申すべし。

名にしおひたる姨捨の、それといはんも恥かしや。それといはんも恥かしや。その古も捨てられて。ただひとりこの山に、澄む月の名の秋ごとに執心の闇を晴らさんと、今宵あらはれ出でたり…。

(中入り)

「その執心石となつて…」

### 後ジテ(老女の亡霊、白衣にて登場)

あら面白の折からやな、…盛りふけたる女郎花の、草衣しほたれて、昔だに捨てられしほどの身を知らで、また姨捨の山に出でて、面を更科の、月に見ゆるも恥かしや。よしや何事も夢の世の、なかなか言はじ思はじや、思ひ草花にめで、月に染みて遊ばん。

### 「月に染みて遊ばん」(浄土現成、月光と同化浄化)

月の名所、いづくはあれど更科や、姨捨山の曇なき、一輪満てる清光の影、…諸仏の御誓ひ、いづれ勝劣なけれども超世の悲願あまねき影、弥陀光明に、しくはなし。…月はかの如來の右の脇士として、有縁を殊に導き、重き罪を軽んずる天上の力を得る故に、大勢至とは号すとか。…他方の浄土をあらはす。玉珠楼の風の音、糸竹の調べとりどりに、…芬芳

しきりに乱れたり。迦陵頻伽のたぐひなき、声をたぐへてもろともに、孔雀鸚鵡の、同じく轉る鳥のおのづから、光も影もおしなべて、至らぬ隈もなければ無辺光とは名づけたり。

### 「しかれども」(反転、留保)

しかれども雲月の、ある時は影満ち、またある時は影欠くる、有為転変の、世の中の定のなきを示すなり。昔恋しき夜遊の袖。

わが心慰めかねつ、更科や、姨捨山に照る月を見て、照る月を見て。

：返せや返せ、昔の秋を、思ひ出でたる妄執の心、やる方もなき。

今宵の秋風、身にしみみと、恋しきは昔、偲ばしきは閻浮の、秋よ友よと、思ひをれば、夜も既にしらしらとはやあさまにもなりぬれば。我も見えず旅人も帰るあとに、

独り捨てられて老女が 昔こそあらめ今もまた、姨捨山とぞなりにける、姨捨山となりにける。

### 成就・落居

c f 物が真に表現的なものとして我々に迫るのは孤独においてである。そして我々が孤独を超えることができるのはその呼び掛けに応える自己の表現活動においてのほかない。アウグステイヌスは、植物は人間から見られることを求めており、見られることがそれにとって救済であるといったが、表現することは物を救うことであり、物を救うことによつて自己を救うことである。(三木清『人生論ノート』)

能々安見するに、万象・森羅、是非・大小、有生・非生、ことごとく、おのおの序破急をそなへたり。鳥のさへづり、虫の鳴く音に至るまで、其分其分の理を鳴くは、序破急なり。しかれば、面白き音感もあり、あはれを催す心も有り。これ、成就なくは、面白しども、あはれさとも思ふべからず。

：成就とは成り就くなり。：成り就くは落居なり。

(世阿弥『拾玉得花』)

金子大栄「花びらは散る 花は散らない」

### 慰霊

死んだ人の霊魂をなぐさめること。

(『大辞林』以下同)

「浮かばせる」ことが慰霊 ↑「浮かばれない」

鎮魂(名) スル①死者の魂をなぐさめ、しずめること。②「たましずめ(鎮魂)①」に同じ。

### 鎮魂

①遊離した、また遊離しようとする魂を鎮め、肉体につなぎ止める祭儀。広義には「たまふり(魂振)①」の意にもいう。みたましずめ。↓鎮魂(ちんこん)②「鎮魂祭(たましずめのまつり)」の略。

魂振り①魂に活力を与え再生させる呪術。また、その呪術を行うこと。②「鎮魂祭(たましずめのまつり)②」に同じ。みたまふり。

※「姨捨」とは、特殊な時代の特殊な営みではなく、いついかなる時代にもある「老いて、死ぬ」こと自体が孕んでいる「慰めかねつ」の思い。

c f 「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」（坂口安吾「文学のふるさと」）

### 附 国木田独歩の光景論

そこで僕は今夜のような晩に独り夜更けて灯に向かっていると、この生の孤立を感じて堪え難いほどの哀情を催して来る。その時僕の主我の角がぼきり折れてしまつて、何だか人懐かしくなつてくる。色々の古い事や友の上を考えだす。その時油然として僕の心に浮かんでくるのは則ちこれらの人々である。そうでない、これらの人々を見た時の周囲の光景の裡に立つこれらの人々である。我と他と何の相違があるか、皆なこれの生を天の一方地の一角に享けて悠々たる行路を辿り、相携えて無窮の天に帰る者ではないか、というような感が心の底から起こつてきて我知らず涙が頬をつたうことがある。その時は実に我もなければ他もない、ただ誰も彼も懐かしくつて、忍ばれてくる。僕はその時ほど心の平穩を感ずることはない、その時ほど自由を感ずることはない、その時ほど名利競争の俗念消えてすべての物に対する同情の念の深い時はない。

（「忘れえぬ人々」）

月はさやかに照り、これらの光景を朦朧たる楕円形のうちに描きだして、田園詩の一節のように浮かべている。自分たちもこの画中の人に加わつて欄に倚つて月を眺めていると、月は緩やかに流るる水面に澄んで映っている。羽虫が水を搏つことに細紋起きてしばらく月の面に小皺がよるばかり。流れは林の間をくねつて出てきたり、：

一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈しおる場処を描写することが、すこぶる自分の詩興を喚び起こすも妙ではないか。なぜかような場処が我らの感を惹くのだろうか。自分は一言にして答えることができる。すなわちこのような町外の光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思いをなさしむるからである。言葉は換えていえば、田舎の人にも都会の人にも感興を起さしむるような物語、小さな物語、しかも哀れの深い物語、あるいは抱腹するような物語が二つ三つそこらの軒先に隠れていそうに思われるからであろう。

（「武蔵野」）